食品ロス削減、そして必要とする人たちに

フードドライブ事業

賞味期限の切れていない食品を回収し、食料支援につなげる『フードドライブ事業』が10月30日に初開催された。

回収場所のピアゴ西春店には多くの市民が訪れ、カップ麺、缶詰、菓子、調味料類などさまざまな食品が集まり、机の上に段々と積み上げられた。実施された3時間の中で832点(45世帯)が寄付され、企画をした市環境課の富田晃弘さんも予想以上の多さと感激していた。

以前、同課が市のごみ組成調査を実施したところ、まだ食べられるのに捨てられている食品が11%も混入していることが判明した(令和2年度)。調査の結果を広報等で発表した際、「何をすればいい」と電話がかかってきたり、内容を記載したページを撮影してSNSに投稿する人もいたりと反響は大きかった。

食品ロスの問題に対する市民の認識が変わろうとしている今、食品が無駄に処分されている状況を改善するとともに、ごみ減量対策につなげることを目的に実施された同事業。食品を寄付しに訪れた人は「駄目にして捨てるのはもったいないからね。家の整理にもなってとても助かります」と話した。

中には「個人的に社会奉仕活動をしたいと考えていたところ、この事業について知りました。お砂糖を買い込んでいたので持ってきました」と、誰でも気軽にできる取り組みとしても喜ばれていた。

今回、名古屋芸術大学生3人も食品の受け取りなどボランティアとして参加した。熊谷美玖さんは「回収してみて分かったことは、同じ商品のストックが多いということでした。安いからとたくさん買って、結局使わず置きっ放しのままが多いことを知りました。皆さんの食品に対する意識が変わってくれる手助けになれたらと思いながら対応しました」、城田菜月さんは「食べられなかったものを回収することで必要な誰かに行き渡る。本来捨ててしまうはずだったものも一工夫することで、誰かにとって役立つもの、意味のあるものに変わるということに気付くことができました」、疋田未有さんは「中には一つだけ持って来られる人もいました。一つだけだと持って行くのが面倒と思いがちですが、少しでも力になれればとここまで足を運んでいただけたんだと実感し、人の温かさにふれることができた気がしました。私は今回事業のポスターを制作しましたが、描いたかいがありました」と活動を通して多くの学びや気付きを得たようす。場内は食品とともに多くの優しい気持ちが持ち寄られ、終始温かい雰囲気に満ちていた。

今回集まった食料はNPO法人フードバンク愛知を通じて子ども食堂等へ送られた。同事業は今後も定期的に行う予定。